



Anthology

01 糸格子

市川 イチ
ナナツ

父はコルネリアの枢職人だった。

生まれて物心もつかぬうちから、私は彼が槌と鑿とをふるう音を聞かない日がなかった。家の中にはいつも皮を剥がれた白い生木の香りがし、あらゆる部屋の隅にまで細かな木屑が入り込んでいた。

私たち兄弟はいつもその木屑まみれの床を分厚い木靴をはいてこわごわと歩いた。母もそうしていた。もしそうしなければ、足の裏はたちまち傷だらけになってしまったから。台所に行くにも、食事をするにも、ベッドで眠るときでさえ、必ずその木靴をはかねばならなかった。枢職人の家に生まれた子供の誰もがそうであるように、そしてその子供たちの誰もがそれを嫌がるように。

私たち兄弟も例にもれず、この鬱陶しい決まり事が嫌でたまらなかった。あれは折しも隣国から新しい文化が入ってきたばかりのころで、市井では家の中で靴を履かぬのが流行しつつあった。床という床にフランドルの分厚い毛織物を敷いて、その上で寝転がって過ごすのが当節の流行だった――さほど裕福でない家もみな競ってそれをした。いっぽう家の中でさえ無数の木屑にまみれて過ごさねばならないみじめさが、子供心に辛かったのだと思う。それに父のお下がりの木靴はまだ子供だった私たちにはとてつもなく大きかったから、いちいち大仰に引きずらねばならず、なんとも歩きにくく不格好だった。

ここに一通の手紙がある。ソレイユと呼ばれた画家の青年が書いたものだ。

ソレイユは本名ではない。けれど、私は彼のことをソレイユと呼ぶことにする。この名前は、本名以上に彼の体にとても馴染んでいた。不思議と、この名前を疑問に思う人は誰もいなかった。

手紙が届いたのは、真っ赤に染まる葉が落ち始めた冬の頃だった。靴越しでもわかる、うっすらとした冷気が指を冷やす夕暮れ時、ポストに寂しく横たわっていた。その名に懐かしむよりも予感がし、かじかむ指をこすりながらその場で開ける。すると、冬だというのに薫風が漂い、寒さを包んでどこかへ連れ去ってしまった。私の心は夏に戻り、現実の冷気と共に紅の秋を辿り、徐々に今の冬に帰る。夏の気配は一瞬で終わってしまったが、ある光景がはっきりと浮かんだ。太陽のように眩しい、カナリア色をしたひまわり畑。まるで一つの花のように、金髪の青年がそこに立っていた。ソレイユだ。……ここまでは私の妄想に過ぎない。

私は家に入り、手紙を机に置いた。顔が隠れるほどぐるぐるに巻いたマフラーを解き、上着をハンガーにかける。ストーブに火を入れようかと考えながらひざ掛けを掴み、腰を落としながら手紙を取る。ひざ掛けを広げ、もう一度封を開けた。夏の香りはもうしない。